

事件は現場で起きています



「悲牛院花子の生涯」(その3) ～育成をなめたらいかんぜよ～

平成4年営農改善資料『特集育成牛』20版より

広酪事業推進課 係長 大島達夫

3回に亘り掲載した「非牛院花子の生涯」は今回で最終回とします。俗名・花子の悲しい物語。育成牛の目線でその運命に感心を示して戴きましたでしょうか。

親牛舎へ

秋も深まって来た頃、主人が彼女を捕まえに来た。ここ数か月間、人に触られたことが無かったので、ひどく恐ろしく感じて、しばらく逃げ回ったが、捕まってしまった。

主人は彼女を親牛舎に連れて行き、スタンションに繋ごうとした。彼女は生まれた日に見たきりスタンションを見たことが無かったので、また怖くて逃げようとしたが、力を入れる度に主人に殴られ、無理矢理スタンションに繋がれた。

怖かったわ。だって春からずっと外にいて、そばで人間を見たことがなかったの。スタンションだって触ったこともないもの。それと牛舎の中って、とても暑い。外の涼しさに慣れていたあたしには湿度は高いし、空気は悪いし、ひどいもんよ。せめて窓を全部外すとかして、外に近い状態にして欲しかった。



悲牛院花子大姉(俗名 花子) ↑

初産分娩

その日から目の前に主人が餌をくれるようになった。慣らし給与として配合飼料も与えられた。

花子は狭い所で寝起きしたことがなかったので、寝起きは辛かった。飼槽との境に打ち付けて肘が腫れ上がった。仔牛の頃に痛めた後肢も痛んだ。

2週間後、突然腹痛に襲われた。陣痛だった。彼女は30か月齢になっていた。体重は500kg程度しかなかったが、慣らし給与の影響か、仔牛は普通よりやや大きかったので、難産ぎみだった。

分娩後、主人はバケツで彼女を搾乳した。彼女にはきらきら光ってシュウシュウ、カチカチする音を立てる機械が恐ろしく感じられた。逃げようとするといかに殴られた。観念すると、乳房にその機械を付けられた。痛かった。蹴り落とそうとすると、また殴られた。腰にアンチキッカーをはめられた。今度は蹴り落とそうにも足を上げられなかった。

ミルクも怖かったわ。でも逃げようとする、殴られるの。最初に付けられたミルクのライナーは堅くて表面がぎゅうぎゅうに擦れてとっても痛かった。せめて後からまともなライナーだったらまだ良かったのに・・・。

御主人様に触れられる度に痛い思いをさせられるもんだから、あたし、すっかり人間嫌いになっちゃった。



天国から

一年後、彼女は屠場にいた。乳量も低く、食い込みが悪くて増体も良くなかった。廃用に落とされたのだ。細い通路に追込まれながら、今度はどんな群れに入れられるのか、いじめられなきゃいいけど・・・と彼女は考えていた。

この物語は、育成牛の管理において酪農家でありがちな光景を捉えて執筆されたようです。

皆さん、この物語から何を感じ取られましたでしょうか？

天国に来てから、あたしは今とっても幸せ。ハンバーガーになった時には御主人様のことを恨んだけど、その後、あたしが廃用になったことを反省した御主人が普及員さんと相談し育成技術を改善して、あたしの妹分たちの待遇がとっても良くなったの。あたしの一生も無駄じゃなかったわけね。あたしの一粒種も幸せに暮らしているわ。何時までもここから娘たちのこと見守っているわ。

